



第127回 インドネシアからの訪問

インドネシアのデイポネゴロ大学一行が鳥取にやってきた。医学生と医学部教員の総勢8名が鳥取大学の地域医療教育を視察にきてくれたのである。じつは2024年3月にインドネシアの医療視察のため、鳥取大学の協定校であるデイポネゴロ大学を医学生と訪問した。蒸し暑い気候とイスラム教徒が多くお酒禁止という文化にとまどったが、デイポネゴロ大学の人たちの笑顔と心配りに感銘を受けた。村や町にはかならず最寄りの公的診療所があり無料で受診できる。妊婦健診、デング熱などの予防、生活習慣病の啓発などを一手に引き受けていた。インドネシアの医学生が英語を自在に話し意見を述べる姿に、鳥取大学の医学生はとも驚いていた。

▼日本の地域医療の最前線を見てもらう

海外の医療団が視察に来ると、最先端の医療機器(ex.ロボット手術)や研究施設の見学を希望することが多い。しかし、今回は日本のプライマリ・ケアと医学教育の視察が目的だったので、一般的な地域の診療現場を見てもらった。米子市内の開業クリニック、大学のサテライト教育施設である日野病院、日南病院、大山診療所などである。インドネシア一行がまず驚いたのは、診療所でも電子カルテが整備され、レントゲン装置、エコー、心電図、胃・大腸内視鏡、血液検査機器が常備されていることだった。そして比較的ゆとりをもって患者さんの話を聞き、診療している医師の姿であった。インドネシアは、子供や若者の人口比率が高く、栄養不良や感染症などで乳幼児死亡率が未だ高い。患者層も子供や若者、妊産婦が多い。インドネシアでは医学部卒業後にインターン見習いの期間に診療所での勤務が義務付けられている。診療所では1時間で20人程度の非常に多くの患者を診察せねばならない。日本では病気だけでなく、患者さんの家族や暮らしまで踏み込んだ話をしている医師の姿に感銘を受けたようだった。

いっぽう、私がインドネシア訪問で感じたのは、医師以外の医療職(助産師、看護師、事務方)が活躍していること、住民自身が地域の健康増進活動

に積極的に関わっている姿であった。公民館のような場でボランティアの住民たちが健康診断や食事提供に協力し、「自分の地域は自分たちで守る」という思いが伝わってきた。インドネシアでは、大学のある大都市(190万人)でも、しっかりしたコミュニティが息づいていると感じた。

▼インドネシアにあって我々にはないもの

インドネシアの若者にあって我々にはないものは何かと問われたら、「未来への希望」と答えるだろう。インドネシアはいろいろな意味で「明日のくに」である。国がどんどん豊かになり、頑張ればそのぶんだけ発展していく。もちろん、公衆衛生の不備や公害、貧富の格差、都市地方の格差などもある。しかし、彼らの生き生きした姿をみていると、私が子供のころの1960年代の日本を思い出す。高度成長まっただなかの、あの熱気と明日への希望に満ちた日々を。私たちは彼らからなにを学ぶべきなのか。今どきの令和のスタイルは、コスパの悪いことはしない、頑張っても無駄、そこそこの安定でよい、本当にこんなことでよいのか。

ニーチェは虚無主義に冒された人間を「末人」と呼んだ。明日を想い、坂の上に一朵の雲を夢見ること。日本の医学生たちはそうあってほしいし、私自身もそうありたいと願っている。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授

谷口 晋一
(たにくち しんいち)